

## 怒る患者たち

今日の午いで、あおり運転」が話題になっている。被害者になったら、どうしようかと、他人ことではない。が、「」の話なら診察室にだってある。

26歳のKさん。てんかんで通院中の患者さん。初診から約2年間、なぜかずっと不機嫌である。今回の血液検査で、薬の血中濃度が低いことが分かった。いろいろな原因は考えられるが、きちんと服薬していない疑いが強い。

「薬のみ忘れはないね?」と聞いてみる。と、即座に「のんでいる」と怖い顔で叱られた。

31歳のA子さん。慢性頭痛の患者さん。時折、ひどい片頭痛の発作で寝込む。生活習慣は変えてくれない。せめて予防薬を処方通りにのんでほしい。が、それもダメ。

「ちょっと鎮痛剤の使い過ぎかも」と話した。途端、Aさんは、「痛いから。のむ。どしどし」というのか」とキじた。鋭い目つきの赤ら顔は忘れられない。

キシヤスイひとというのは、情動の中枢である大脳辺縁系をコントロールする

前頭前野に問題があるとされる。育った環境によって、前頭前野が未発達のままという若いひとでも少なくない。前頭前野の働きに必要なセロトニンが欠乏しているという節もある。パソコンやスマホの普及とも関係があるらしい。

ところで、何がきっかけで、Kさんはキじたのだろうか?

医者というのは、時には患者さんにとって耳が痛いことも言わなければならぬ。だが、対等意識の強い彼らは、上から目線で指示されたように感じ、プライドが傷ついたのだろうか?あおり運転でも、「理由が分からない」と話す被害者もいる。

で、老人は、「今の若いひとは」という古今東西の決まり文句で片付けたくなる。が、それでは、同じことが繰り返される。どうお相手すべきか、知恵を絞らねば。呆けてはおれない。

(石黒修三) いし黒くろクリニック・脳神経外科専門医・4/26北國新聞掲載)